

琉球大学学術リポジトリ

沖縄の風に関する知識と伝承

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2015-12-09 キーワード (Ja): 風根, 風願い, 風鎮め, 風占い, 風のまじない キーワード (En): 作成者: 山里, 純一, Yamazato, Junichi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/32866

沖縄の風に関する知識と伝承

山 里 純 一

Reading the Wind in Okinawan Folklore

Junichi YAMAZATO

要 旨

沖縄は日本本土とは風に対する考えが異なる。たとえば日本各地にある「風穴」という言葉は沖縄では全く聞かない。むしろ琉球国時代から今日まで、王府役人から庶民に至るまでよく用いられた言葉は「風根」であった。また沖縄は、毎年数個の台風が襲来するが、日本本土に見られる風切り鎌のような風除けを目的とした習俗や、辟邪物はない。航海の時や作物の生長期に風を鎮める祈願は行われるが、それは本土の風神や風鎮祭とは必ずしも同じではない。沖縄にはそもそも風に対する祭祀儀礼が存在しないのである。沖縄の地理的環境は、風についても独自の概念と民俗を生み出した。

キーワード：風根 風願い 風鎮め 風占い 風のまじない

はじめに

風の研究に先鞭をつけたのは民俗学者の柳田国男で、柳田は全国各地の風の名称（方言名）について調査し『風位考資料』（1935年）『増補風位考資料』（1942年）を著した（『定本柳田国男集』20巻所収）。これを受け気象学者の関口武は『風の事典』（原書房、1985年）において風の名称を集成している。

最近の研究では、中山正典が漁業と風の関係が詳細に記された『静岡縣水産誌』を利用しつつ、独自のフィールド調査によって人々の風の認識と風の利用の実態的研究を行い、『風と環境の民俗』（吉川弘文館、2009年）を出版している。

また田口龍雄の随筆集『風祭』『続風祭』は、さまざまな古文献史料に見える気象関係記事を博搜しており、風の諸相を知る上でも貴重である。

しかしこれらの調査および研究において沖縄は含まれていない。沖縄の風に関する記述は、古くは久米島の堂のひやが書き残したと言われる「堂のひや伝」⁽¹⁾や程順則の「風信考」⁽²⁾が知られる。近代以降では、岩崎卓爾が石垣島測候所の所長時代に八重山の気象について丹念に記録し、学会などで発表しているが、その中に風に関するさまざまな民俗知識も紹介されている⁽³⁾。それ以後も気象学についての専門的な知識を持つ方々の著作は少なからずある⁽⁴⁾。沖縄県の各自

治体史などでも、民俗知識として風のことが取り上げられているものが多々ある。

ところで沖縄・宮古・八重山地方は、台風銀座と呼ばれるように毎年数個の台風が襲来する。台風は確かに家屋や農作物に被害を及ぼすが、同時に恵みの雨をもたらしてくれる。また周囲を海で囲まれた離島県の沖縄では、移動や輸送手段として船に多くを頼らざるを得ない。特に帆船時代の航行は風に大きく左右された。人々は日々の暮らしの中で、天候や季節による風向きと風の強弱を敏感に感じ取り、風を避け、あるいはまた風を利用してきたのである。

小稿では、沖縄の人々が風をどのように認識し、また日々の暮らしの中でどのように風と向き合っていたかを、史料や歌謡および民俗・伝承資料をもとに検討することにしたい。

1. 風根

風はどこから生じるのか。日本本土では「風穴」というものが各地にあり、風はそうした風の住居とでもいうべき「風穴」から吹いてくると考えられていたようである。しかし沖縄では『おもろさうし』に「太陽の穴」という表現はしばしば出てくるが、「風穴」という語はなく、むしろカジヌニー、カザニ、カザネ、カジナーなどと呼ばれる「風根」の用語が、史料や歌謡や伝承などに比較的多く見られる。ただ「風根」の意味するところは必ずしも一定していない。

(1) 風根の気象学的解釈

八重山には「風根ぬ立つかー 風吹くん」という天気俚諺がある。喜舎場永珣の意識によれば「五（御カ）光が見えたら暴風の兆」とある⁽⁵⁾。岩崎卓爾は「カザネ（後光？）現はるれば大風の兆、其東西へ連続すると俗に天割テンワレと称して恐怖さる」と紹介する⁽⁶⁾。また石垣市の宮良では、「風根ぬ割かざにりばるか 風が吹く（風の根が割れると暴風になる）」という古老の伝承も聞かれる。気象学的に言えば、風根は雄大積雲や積乱雲の影で、それがいわゆる御光または後光であり、こうした風根を作り出す積乱雲などは、遠くにある台風の中心に巻き込んでいるクラウド・ラインの中で発達することが多いので、確かに台風接近の兆候のようであるという⁽⁷⁾。

一方、『球陽』には二箇所風根の記事が出てくる。

①又上届巳年五月、具志川郡の船隻、公布を装載し、兼城港に在りて開洋し、具志川村洋面を駛せ過ぐるのとき、風に風の根の転旋するに遇ひ、碇を抛ちて停泊す。奈んせん風波いか猛起し、正に危急に在り。（尚泰9年〈1856〉本年条）

②去年冬、獄庭員役等、宮古島に航するの時、池間村洋面に駕到するや、風の根俄に転じ、大雨忽ち降る。（尚泰15年〈1862〉本年条）

嘉手納宗徳は、この『球陽』に見える風根について、カジヌニーと方言読みを示した上で、「ある場合には低気圧の位置を示し、ある時には台風前兆の余映を示す」と解釈している⁽⁸⁾。

しかし史料や歌謡に散見される風根には、低気圧というような気象学的な意味合いはあまり認められない。

(2) 「風本」「風向」としての風根

「勅使御迎大夫真栄里親方日記」⁽⁹⁾によれば、同治4年（1865）10月12日条に、

今日、風子之方相成候付、針筋寅卯之間、七ツ時分粟国島致通船候処、漸々風根相下、卯辰之間相成候付、夜四ツ時分針筋酉戌之間、

とあり、同14日条にも、

今日、小雨、風寅之方、針筋酉戌之間ニ而候処、夜中風根段々相替候付、右ニ応し針筋取り直し到通船候事、

とある。ここでの風根は風を生ずる本源のこのようである。

同じ表現は他の史料にも見える。たとえば文政2年（1819）5月13日に琉球の馬艦船が水戸藩川尻村へ漂着し、その時の水戸藩側が船頭に訊問した記録「琉球船漂着始末」⁽¹⁰⁾には、次のような問答がある。すなわち、八重山へ向けて出帆しながら風に煽られ漂流したいきさつについて尋ねたのに対して、「申方より寅卯の方へ乗行、口より風根子丑之方罷成候付、酉戌の方通船仕候処、此御地江取着仕候」と述べている。

また『翁長親方八重山島規模帳』⁽¹¹⁾には、「殊ニ彼島（与那国島）之儀者難海津口も狭キ所ニ而、船々積荷出帆之当日干瀬外江沖懸ニ而、一時ニ積仕廻出帆仕候体故、俄風根相替候節ハ、積穀卸取、津口江挽入旁之所云々」とある。さらに浄土真宗の信徒で八重山へ流罪となった仲尾次政隆の日記「仲尾次政隆翁日記」⁽¹²⁾には、安政2年（1855）11月12日同日条に「七ツ時分ニ者風根相替候付、乗戻候付」とか、12月26日同日条にも「七ツ過時分、今朝出帆之船、九ツ時分より風根相替、波も荒立候由ニ而乗戻」とある。

これらの史料に見える風根の語は、いずれも風を生ずる本源ないしは風向きの意味で用いられている。

後にも取り上げるが、伊平屋島の新垣家文書「萬曆書」⁽¹³⁾に「毎年冬至之日未明ニ風根を見て来年作毛并年中運を知る事」と見える風根も同じであろう。

一方、『おもろさうし』第三「きこゑ大ぎみがなしおもろ御さうし」の一節には、

風 <small>かす</small> の根 <small>ね</small> も	風 <small>と</small> り直 <small>なお</small> ちへ	風 <small>かす</small> の根 <small>ね</small> も	穏 <small>なご</small> やかにして
久米 <small>くまい</small> の島	押し合 <small>あ</small> わち	久米 <small>くまい</small> 島	
荒 <small>すさ</small> の根 <small>ね</small> も	直 <small>ち</small> ちへ	荒 <small>すさ</small> 風 <small>かぜ</small> の根 <small>ね</small> も	
金 <small>かね</small> の島	引 <small>ひ</small> き合 <small>あ</small> わちへ	金 <small>かね</small> の島（久米島の美称）へ	

とある。ここでいう「風の根」は、「風の吹いてくる源」のことと解されている（日本思想大系『おもろさうし』52頁注）。風の源というのは、後述する八重山博物館所蔵『星図』に「風、子丑之本ニシテ下り順風能候」とある風の本と同じ意味であろう。同資料には、他に次のような記事がある。

天ニ無雲無風ニ而何方風根ニ而哉不相知時之見様ハ、天四方見渡候得者、雲少ニ而も有之所を見て、其雲上江あかり候ハ、其所ハ風本与可心得候。又其雲下江さかり候ハ、風下与可心得候。

すなわち、空に雲がなく、風も吹いていない時の風根を見分ける方法として、天空にわずかな雲を見つけて、それが上へあがるとそこが風本で、逆に下がるとそこは風下にあたるという。ここでは風根と風本は同義語として用いられている。

ところで、八重山歌謡の「まるま盆さん節」（喜舎場永珣『八重山民謡誌』360頁）には、

まるま盆ぶんさん まるま盆さんを

ユナユナ見りば
かじ ね し
風ぬ根を 知ち
い しるさや
居ちゆる 白鷺

夕暮れ時に眺めていると
風の方向を良く知っていると見えて
(島の反対側に) 坐っている (利口な) 白鷺よ

とあり、西表島西部の祖納湾に浮かぶ「まるま盆さん」をねぐらとする白鷺は、風の根を知っていて、風が吹いてくる反対側に群がっている光景を詩にしている。すなわちここでは、風が吹いてくる方向を風の根と認識しているようである。

登野城の「浦船ジラバ」(喜舎場永珣『八重山古謡』上巻87頁)には、首里への公用旅を命じられ、うりずん(旧暦2、3月)に吹く南風を待って出港した様子が謡われているが、その一節に、次のようにある。

びぎりゃ船	兄さんたちの公用船は
何待ち うるかや	何を待っているのだろうか
風待ちい	順風を
上待ちいどう うるよ	良き風を待っているよ
じいま 何処ぬ風	どこから吹く風を
どうきゃぬ上ぬどう 待ちうる	どのような順風を待っているのか
午ぬ方ぬ 未ぬ方から	東南の方の 南方から吹く
根ぬ風	根から吹いてくる風を

ここでの「根の風」という表現からも、風には源があると捉えられていたことが知られる。

(3) 風根の正体

しかし風が発生する源について、それが具体的にどのようなものであるかは伝えていないが、八重山古謡の中には、風根を雲であると謡っているものがある。竹富の「風が根アユー」(上勢頭亨『竹富島誌〈歌謡・芸能篇〉』17頁)は次のように謡われている。

かじ にー 風が根や	風のもとは
なゆ にぎ 何どう根やる	何がもとである
ふむ 雲どうにぎーやる	雲がもとである
うい にー 上が根や	上のもとは
なゆ にぎ 何どう根やる	何がもとである
ぬりどうにぎーやる	乗り雲がもとである

同じ表現は、与那国の「とぐるだきデラバ」(『南島歌謡大成 IV八重山篇』284頁)にも見える。

かて に 風が根や	風の根は
うい に 上が根や	上(風と同じ)が根は
め くむ もと 乗り雲ど本	乗り雲が本である
かて くぬ風に	この風に乗って
ん くぬ船に	船を
い いださば	出せば
に 根だいな	根を絶やすな

むと 本だいなすな	本を絶やすな
かて やる風	追い風よ
かて くぬ風に	この風で
いだしば	出船すれば
とう うい 渡ぬ上にむたさば	海上に漕ぎ出せば

(以下略)

なお黒島の「ばいふた ふんたかユングトゥ」(喜舎場永珣『八重山民俗誌』下巻所収)は、ばいふた村に生まれたふんたかという人が、舟を造って宮古島に行き曲玉を買って帰島するまでのきごとを誦んだ長編の古謡であるが、その中に順風が発生する様子を謡った箇所がある。すなわち、牧泊、前泊の潮鳴りを聞いていると70、80歳頃の老翁の(弱くて力のない)咳のように聞こえたので、なぜだろうと庭に出て空の雲を見上げ、次のように謡う。

びす な一ばん人ぬ	長い足の人
あざく 畦越いるにん	畦を越えるように
越いな越い	次々と越えて
ぶりばどう	いるので
あ一風	ああ風が
ま 生りるんまな	生じる兆候だ
ういや	上(風の対語)が
し 産でいるんまってい	生まれるだろう

これは南風が吹く際の雲行きを表現している。喜舎場永珣による「越いな越い」の語の注によれば、「切れ切れな上層雲の歩みはゆるく、反対に切れ切れな下層雲の歩みは早い。そこで上層雲の切れ切れを畦にたとえ、下層雲を膺長人の足にたとえて、その雲が早くその畦と畦とを通過して行く状態を形容した」ものであるという(『八重山民俗誌』下巻215~216頁)。

ここでは風の根については直接語っていないが、風を雲との関係で捉えている。

以上のように、沖縄には「風の根」という独自の概念があった。それは気象学的に低気圧の発生と関係する現象として捉えられることもある。しかし一般的には、風を生み出す根(本)があり、風はそこから吹いてくるという考えられていた。それを発生させるものは雲であるという見方もあった。したがって風の本が「風の根」であり、風が吹いてくる方向に「風の根」があることから風向きも「風の根」と称していたようである。

2. 風願い

享保11年(1726)10月に尚敬王の国頭地方巡行の際、休憩のために立ち寄った恩納村の「万座毛」で、女歌人の恩納なべが詠んだと伝えられる琉歌に次のようなものがある。

波の声もとまれ 風の声もとまれ 首里天加那志 美御機 拝ま

(波の声も止まれ 風の声もとまれ 首里の国王様の御顔を拝みましょう)

「波の声もとまれ 風の声もとまれ」と自然に対して命令できるのは、あくまで文学の世界である。実際には自然の営みは人間の力では変えることができない。風に働きかけることができる

とすれば、それはせいぜい祈願の場においてのみであった。

(1) 航海の安全祈願

順風を待って船出しても、航海途中に天候が急変し遭難・漂流の憂き目にあうこともあり、航海は命がけであった。そのため航海安全で無事に公務を終えて帰って来れるように、さまざまなレベルで、さまざまな場所でさまざまな方法による祈願が行われた。

まず『琉球国由来記』巻五によれば、「風ノ御願」の時には、首里殿内の火神前に、仙香（線香）一結、御花一对、五水（酒）一对を供え、御崇（おたかべ）をする。座敷一員、当一員、勢頭一員、親雲上二員、里之子一員、筑登之一員が冠・朝服で参列し、三拝九拝を行うとある。この王府による「風ノ御願」が、いかなる時に行われるかは特に示されていないが、第一に考えられるのは中国への渡航と帰帆、第二には薩摩への上国と帰国の際であろう。

風の願いは家レベルでも行われており、『伊江親方日々記』⁽¹⁴⁾ 嘉慶12年（1807）7月3日条によれば、風御願を行うために西森へ出かけたことが記されている。嘉慶13年3月28日には、「下り風」が継続して吹かないため「上下やしき中下やしき」へ出かけ、「後ノへつる御神」へ「風之御願」を行っており、同年10月5日にも、喜友名里之子親雲上が近々帰帆する筈ということで、宜寿次・喜名家の人々を招いて「風之御願」を行ったことが見える。

八重山では、旅役を任せられた人の家の婦女子や親類縁者の婦女子は真乙姥御嶽に籠って、航海の安全と公務を無事終えて帰島できるように祈った。その時「風願い」と称して真乙姥御嶽の前で婦女子が綱引きをしたという⁽¹⁵⁾。

なお『中山伝信録』巻第六「風俗」には次のような記載がある。

官吏の家で、渡海している人があると、木を切って小さい舟を作る。長さは一尺ほどで、帆柱もみなそろっている。竿の先につけて庭に立てる。これで風向きをみて、帰る日を占うのである。帰ると取り除く。

これは中国および薩摩へ派遣される使者・随行員の家で見られる光景であるが、宮古・八重山から首里へ上国する時も風旗を高い木の上に設置したり、竿の先にとりつけ庭に立て、風向を見て帰りの時期を予測した。

風の願いは旅の途中、風待ちの間に行われることもあった。『琉球勅使御迎大夫真栄里親方日記』（前掲）同治4年（1865）8月9日条によれば、尚泰を冊封するための使節を迎接するために中国へ向かった真栄里親雲上（後に親方）は、那覇を出港し久米島を通船したところで風が戊亥の間（北西）に変わったため座喜味島の阿嘉泊に引き返した。彼が乗った接貢船の船頭と頭号船の船頭両人は、「風之御立願」として阿嘉村のん殿内と同所の嶽々を参詣し、御花米と御五水、また座間味・渡嘉敷両間切からの屋久かい四甲を供えている。津口に船が停泊している間は、先例のように船中で豚一疋・御花・御五水・仙香を供えて両船頭が佐事とともに風の御立願を行っている。

その効果があってか翌10日には風が卯の方向に変わったため、阿嘉泊を出帆した。12日に粟国島そして13日に久米島を通船したが、14日「夜中風根段々相替候」ということで15日には風波荒れ、船内に祀ってある御船菩薩加那志（媽祖）および怡山院、宮之上の菩薩加那志（媽祖）に立願し、同17日ようやく中国の錠海へ到着している。

船中で行われる風の願いは渡唐前にも行われ、祈願の対象は菩薩加那志（媽祖）であった。「田里筑登之親雲上渡唐準備日記」によれば、「風之御立願」として渡唐船へ乗り込み、色衣帽子にて船菩薩へ三跪九叩頭の拝礼を二度行い、また中国福州市の怡山院、宮之上、舎人廟、尚書廟四ヶ所へ御船菩薩の取り次ぎによって三跪九叩頭の拝礼を一度づつ行っている。

以上の「風願い」は琉球船に対して行われる儀式であるが、大和船の場合はこれとやや様相が異なる。貝姓・高里親雲上が書いた同治11年（明治5、1872）5月10日の「日記」（『那覇市史』資料篇第一巻9）によれば、大和船への風の願いとして潟原で相撲が行われ、里主（伊野波親雲上）・御物城（本人）・大和横目（松田親雲上）等が伊地知壯之丞と奈良原幸五郎から招待されている。本人は外戚に不幸があったため欠席したが、他の二人は弁当持参でこれを見学し花代も出したという。風願いに賓客を招いて相撲を行うというのは大和式であろうか。沖縄の風願いには見られない習俗である。

（2）農作物の生長祈願

宮古島市池間島や平良西原では旧暦3月に大風が吹かないように「風鎮め」の行事がある（『沖縄民俗』19）。また狩俣にも旧暦8月申の日を選んで行われる「ウカジダミ（御風鎮め）」の「風願い」がある。二日間行われる神事では、御風鎮めのニガリが唱えられ、そして御風鎮めのピヤーンが謡われる。この神事の流れて神歌については新里幸昭氏の紹介がある⁽¹⁶⁾。

八重山地方では波照間島に「インプス・カチブス」すなわちイン（海）やカチ（風）を鎮める神事があり、ヌブリィ、ヒーブリィ、トゥマニゲエ、シピランカンという農耕儀礼の中で行われる⁽¹⁷⁾。ヌブリィで唱えられるニゲエには、次のように風を鎮める詞章が含まれている。

インプス・カチブスヌウゴン アゴーラバ	海や風が穏やかになる願いを捧げますので
インプス・カチブス ア	なにとぞ
ナガフク・ペーフク ビシェータボーリオーリ	長い波・短い波を鎮めて下さい
ネーラカチ・マーラカチヤ	西の風・東の風が
ペーナリオラバン ニシナリオラバン	南に変わっても、北に変わっても
ヤーラミグリィ ケーミグリィシ タボーリオーリ	やさしく吹くように、美しく吹くようにして下さい
アーリィミグリィ ショール ウヤンヤ	東風を吹かせるウヤンよ
ケーミグリィ ビシェータボーリオーリ	美しく鎮めて下さい
イリィミグリィ ショール ウヤンヤ	西風を吹かせるウヤンよ
ヤーラミグリィ ビシェータボーリオーリ	やわらかに鎮めて下さい

ヒーブリィ儀礼では「オルル」と言って、立ったまま口に両手をほら貝のようにあてがい「オーオーオー オーオオオイー イーイイオオオイー（三回繰り返す） オーリョーリョー オーリョーリョー オーリョーリョー トーチ」と声を出す独特の方法で、インプス・カチブスの祈願を行う。

トゥマニゲエ、シピランカンでも、ニゲエの中で、豊かな収穫のために海や風の平穏、穏やかな天候の祈りが捧げられる。

なお波照間では、収穫期前に台風が来たり、東風が吹き荒れる時、島の東部の特定の家の女た

ちが、「おー、ピラチ坂のウヤンよ、田畑には粟も稲もありますので、どうか、東の風を止め、私達を助けて下さい」というような唱え言をピラチ坂下（東と西の宗教的境界）で繰り返すという報告例もある。

竹富島には、「風の願い」（『竹富島誌〈民話・民俗篇〉』245頁）の時に唱えるニガイフチイが伝わっている。

<small>かじむとう に うし</small> 風元ぬ 子丑ぬ方はら <small>あらば かじ たかば かじ</small> 荒走いぬ風 高走いぬ風ぬ <small>ていどうん むとう くー</small> 竹富 元ぬ島に吹き来ば <small>たつみ う びり</small> 辰巳はら 降りのうり 坐のうり <small>ていん ばい</small> 天おーり 南のうらぬ島 <small>かじむとう</small> 風元ぬ島な一おーり <small>かに び むとう び</small> 金坐 元坐おーりていり <small>いちか ぐし とおか ぐし ゆうあみ</small> 五日越 十日越ぬ 夜雨ん <small>あみ たぼ</small> ふくる雨ん 給うらりていり <small>すくるむぬ ほうるむぬ まんざく</small> 作物 穂物や 満作しみていり <small>ま し たぼ</small> 生り甲斐 産じ甲斐や安心し給うり <small>く かじ かじむとう</small> 此ぬ風ぬ 風元ぬ <small>まんがあら かん まい</small> 万荒頭ぬ 神ぬ前や <small>にが う たぼ</small> 願い受き給うり <small>とう う たぼ</small> 取り受き給うりていり <small>かじびい にが</small> 風坐ぬ 願いや <small>にが かな たぼ</small> 願い叶し給うり うーとうとう	風元の 子丑の方から 荒い風 高い風が 竹富島 元島に吹いて来たなら 辰巳の方角から 降り直り 坐り直り 天に行かれ 南方の島 風元の島に行かれ 金坐り 元坐りなさり 五日越し 十日越しの 夜雨も やわらかな雨にも 恵まれて 作物 穂物は 満作にさせて 人々を安心させてください この風の 元風の 万荒れの 神様は 願いを受けて下さい 取り受けて下さって 風静まりの 願いは 願いを叶わせて下さい あ一尊
--	---

内容的には、船旅ではなく、農作物の収穫前に北方からの強風が吹いた時の風鎮めの願いである。

『八重山島大阿母由来記』⁽¹⁸⁾には、

三月より六月まで穀不熟時、又定納船大和船浮候時分大風催有之候得者、大阿母より石垣・登野城式ヶ村之女家内より壱人つゝ相揃させ、美崎・宮鳥・長崎三ヶ所之御嶽え為可風止御願仕、又早之時分同前被出雨乞被仕候、

とあり、3月から6月にかけては農作物や航海にとって重要な時期であり、その頃に大風が吹いた時には、八重山の司祭者である大阿母たちによって、美崎・宮鳥・長崎三ヶ所の御嶽で「風止」の祈願が行われたようである。また早魃の時もそこで雨乞いが行われるという。この「風止」の祈願は大風が吹いた時に行われるもので、年中行事化されていたわけではない。

「風の祈願」を年中行事として行っていたのは沖縄本島の北部地域にわずかに残っている。名護市の真喜屋・稲嶺地区では、旧暦5月に能呂殿内にて「風の御拝」を行っている（「真喜屋稲嶺合同御願日記」）。田井等・親川地区ではハミヌミヤ（神の庭）というところで女性三神役によって「風の御願」が行われる（『名護市史・民俗I』）。

なお「風願い」の性格を持つ行事として、4月から5月にかけて行われる「海止み山止み」が

ある。これは稲穂が出て、稔る頃に大風が吹いて稲の成熟が妨げられないようにという祈願行事である。年中行事として琉球国時代から行われていたようで、『琉球国由来記』巻一「王城之公事」にも「山留」の項目があり、大風が吹いて作物が害されるのを恐れるための齋戒であると記されている。

石垣市の川平では、この期間、生理中の女性が海に入ると海神の怒りに触れて嵐が起こり、稲に潮害を与えるといい、また男が山に入って木を切り倒すと、倒れる木の勢いで山風が起こり、稲に風害をもたらすと言われた（『川平村の歴史』88頁）。

3. 風の情報資料

先人が書き残した風に関する資料がある。その内容は、単なる観天望気ではなく、経験と観察によって得られた知識で、現代の気象学に照らしても十分通用するものである。

(1) 「風信考」

琉球国時代の1708年に、程順則（名護親方）が著した『指南広義』に「風信考」という項目がある。彼の琉球国中山王府進貢正義大夫の肩書きからもわかるように、進貢使として清国へ派遣された経験をもとに、那覇 - 福州間を往来する航海業者のために書かれたものである。その一部を見ておこう。

清明（4月5日ごろ）の後、南風がいつも吹くようになり、霜降（10月23日ごろ）の後、北風がいつも吹くようになる。もし通常に反するような場合、颶(たい)（台風のこと）や颶(ぐ)（温帯低気圧のこと）が起こる。風速が大きく烈しいものが颶で、それよりも更に大きく烈しいものが颶である。颶はあっという間に起こってすぐ止むが、颶はだんだんとやって来て、昼夜に及び、あるいは数日たっても止まない。正・2・3・4月に発生するのが颶で、5・6・7・8月に発生するのが颶である。5・6・7・8月は南風に属しており、颶が起ころうとしている時は、北風がまずやってきて、風向きが変わって東南となり、また変わって南の風となり、更に変わって西南の風となる。9月は北風がはじめて烈しく、或いは毎月のこともある。俗に九降風と呼ぶ。颶や颶がはじめて来る時は、多くは雨を伴っているが、九降風は雨が降らない。

さらに船が、洋上で颶にあえば何とかなるが、颶に逢えばなすすべはないことや、颶が接近してくる時の気象状況や対策についても記されている。

ところで「風信考」の知識は、那覇 - 福州間だけでなく、那覇 - 薩摩や那覇 - 宮古・八重山を往復する船にとっても通用する。石垣市立八重山博物館所蔵の「佐久真家文書」や「糸洲家文書」にもこの一部が書写されており、離島の士族の間にもその知識が伝わっていたことが知られる。

(2) 『星図』

風は星や星座とも無関係ではない。八重山博物館には、道光7年（1827）に長興氏善康（崎山仁屋）によって筆写された「星図」と題する文書が所蔵されている。乾隆41年（1776）3月に、上官氏の「白保目差正方」が波照間島に勤務中、島の農民から聞いた星の出入と農作物の栽培と

の関係を十数年にわたって試してきた結果を子孫のために書き記したとされる「星図」と、奥付もなく、「星図」との関係も不分明な「天気見様之事」から成るが、双方に、星の方言名と、その星および星座が姿を現す期間、そして出る方位と入る方位が記され、同時に、農作物の播種の時期と風に関する記述が見られる。八重山博物館には、もう一冊、星および星座の出入と風との関係を記した文書がある⁽¹⁹⁾。また宮古の多良間島にも「星見様」が残されている⁽²⁰⁾。

その中の「星図」に記された内容を整理すると(表1)のようになる。方言名のさまざまな星や星座が出てくるが、それらが天空に姿を現す時期と風との関係を記している。

(表1)「星図」に記された星および星座と風の関係

星の名	出現期間	出入方角・気象と航海および農業への影響
小ヨチャ星	7/10 ~ 末	日入時分に寅卯より出て酉に入る。 風不順のため心安からず。風波荒れ立つ。時に大風吹き出すことあり。
大ヨチャ星 七ツ星	8/1 ~ 8/30 8/1 ~ 8/7.8	日入時分に寅より出て申に入る。 未明五ツ丑より出る。 この時から北風和々吹続く。俗に「五ツ風カイマニシ」と言う。 大ヨチャ星入る頃に風根の上り下りが頻繁にあれば大風吹く。
カボシ星 七ツ星	9/1 ~ 9/20 9/1 ~ 9/7.8	日入時分に寅より出て酉に入る。 未明時分に丑よりすべて出終えた頃、カボシ星が入る。 →菰植え、小麦の蒔と取り付け。 雨続き、時として大風吹き出すことあり。
六ツ星	9/20~ 10/10	日入時分に寅より出て酉に入る。 風和々、折々小雨降る→大麦・粟初蒔き。
ウトナ星	10/10 ~ 末	日入時分に丑寅の間より出て亥に入る。 この時分、3,4日雨続く→田作業適さず 丑寅を本とする和風吹く→海上念遣いなし
箕星	11/1~ 11/20	日入時分に寅より出て酉に入る。 晴天続く→世間油断無く、田畠入念に。 丑寅を本とする和風吹く→海上心安し。
立明星	11/20~12/10	日入時分に卯より出て酉に入る。 時々小雨降る→粟蒔き最中 12月20までの間、子丑の間を本とする下り順風能し。
式ツ星	12/10 ~ 1/1	日入時分に卯より出て酉に入る。 亥子を本とする風吹き、雨降ること多い→海上難をなす。

大ウラ星	1/1 ~ 1/20	日入時分に卯より出て酉に入る。 寒晴れ→初粟草払い、稲植えの最中 上がり始めより巳の時に上がる間→和風 1月末頃→箕星ひるま之南風、年によって2,3日吹く。
小ヨチャ星	1/20 ~ 2/10	ヨドム。未明時分に寅卯間より出る。 北風、寒さ残る。
大ヨチャ星	2/10 ~ 3/1	ヨドム。未明時分に寅より出る。 2/10 ~ 2/15の間は南風あり。「明ひるまはい」「けらはい」と言う。 2/15 ~ 3/1の間は「式つ星ひるま南」とて南風あり。「しらせ風」とも。 3/1のヨドム後、北風、寒さ残る→海上よし。
カボシ星	3/10 ~ 4/1	ヨドム。未明時分に寅より出る。 「おさはにし風」とて北風あり。 年に依って風めぐり強し。または曇り南風吹くことあり。「くらはい」
六ツ星	4/7.8 ~ 5/1	ヨドム。未明時分に寅より出る。 4/7.8頃、日入始め時、北風7~8日吹く。俗に「ようかにし」と言う。 2/20頃まで「おさはにし風」とて北風吹く。この後、南風となる。 4/20以後「おまはい」とてきびしい風あり。7月まで吹くことあり。
箕星	5/1 ~ 5/20	ヨドム。未明時分に寅より出る。 南風吹き続く。 風が余りに強く吹く時は風波荒立て、風北に上がり大風となることもあり。
立明星	5/25 ~ 6/20	ヨドム。未明時分に卯より出る。ヨドム期間は風なし。 和かな南風吹く。「あられとれ」と言う。 「はいめ星」南中し「酉星」が少し下がる時分に、立明星が北に上がれば大風吹くことあり。
式ツ星	6/20 ~ 7/10	ヨドム。(未明時分に)卯より出る。ヨドム期間、「天川のひるまなき」とて風なし。俗に「おつきとりほなつとれ」と言う。
大ウラ星	6/25 ~ 7/20	ヨドム。未明時分に卯より出る。波風荒立つ気配あり。 小ヨチャ星が日入時分の出始め時、風波荒立つ。

注 星および星座の方言名はおおむね次のように推定されている。

小ヨチャ星：いるか座の綾形

大ヨチャ星：ベガサスの大四辺形

七ツ星：大熊座の北斗七星

カボシ星：おひつじ座の $\alpha \cdot \beta \cdot \gamma$

六ツ星：すばる、プレアデス星団

ウトナ星：ぎょしゃ座のカペラ

箕星：アルデバランを中心とする星座

立明星：オリオン座の中央の三つの星を中心に形成される星座

式ツ星：双子座の $\alpha \cdot \beta$

大ウラ星：シリウス

(3) 堂のひや伝

久米島の堂のひやという人物が作成したという「天気見様」が沖縄の各地に伝わっている⁽²¹⁾。「風見様」として伝えられているところもある。その内容は、天気の特徴を表す独特の言葉をもって示し、それが二十四節気の冬至を起点として何日目にあたるかを記したものが基本となっている。

冬至より三十七日目「東のおもち」
同 四十六日目「たうのくさ」
同 六十一日目「赤崎なふり」
同 六十七日目「西のおもち」
同 七十三日目 南風
同 七十九日目「黒干瀬の破り」
同 八十六日目「二月風廻り」

「」の中の言葉は、各地の「堂のひや伝」の表記に異同がある。「東のおもち」「西のおもち」はいずれも北風が強い気象を指す。伊波普猷は「寒さ」の呼称に双方の語が出てくることを指摘する⁽²²⁾。「黒干瀬の破り」は旧暦2月の寒さを言う。「赤崎なふり」は天気快晴を表す。「南風」とあるのは旧暦2月中に吹く南風のことである。

「たうのくさ」は「堂乃こさ」「唐腹」「唐ノ口」「当暖」など、各地の伝承がバラバラであるが、「のくさ」は方言のぬくさ（暖かい）であるから「当暖」が穏当であろう。久米島に伝わる「先堂之ひや」によれば「正月立春の節」の暖かい気象のことである。

「二月風廻り」については次節で扱うが、冬至から数えて86日目は、「先堂之ひや」によれば「鳥石の破れ」と呼ばれ、雨風のある日と説明される。

なお各地に残る「堂のひや伝」には、日本本土から伝わった「二百十日」「二百二十日」の知識や、種子取りの日、また何月何日何時頃の雨風などの気象予測など、天気に関わるさまざまな知識や情報が「堂のひや」に付会されている。

4. 台湾坊主とニンガチカジマーイ

旧暦2月から4月にかけて台湾付近で発生する低気圧は「台湾坊主」と呼ばれ、急に発達し、早い速度で沖縄近海を通過し北東へ移動するため、至る所で大きな被害をもたらすことがある。

八重山に「ザンザブロウ節」という民謡がある。別名「高那節」ともいう。歌詞が難解なため大意を把握するのは困難であるが、伝承などをもとに喜舎場永珣は次のような解説を施している（『八重山民謡誌』314頁）。ザンザブロウとは山三郎という大和人の名前で、彼は中国から日本への帰途、台風に遭って西表島の高那村に漂着し、地元の女性を娶り永住した。ある年の3月3日、娘をはじめ村の青年男女が恒例の潮干狩りに出かけたところ、北方の空にはわかには曇り旋風とともに豪雨となった。村では青年たちの安否を心配して大騒動になったが、しばらくして風雨はおさまり、青年たちは全員無事島に戻ってきた。山三郎が嬉しさのあまり作詞作曲したのがこの歌であると。気候が急変した様子は次のように表現されている。

あみ雨ときいが降る時 ヨーアンネ 雨が

さー北 <small>にしい</small> から	北方の空から
曇 <small>くむ</small> るヤーエスリ	曇 <small>くむ</small> ってきて
ゆばいする時 <small>とき</small>	風がにわか <small>にしい</small> に吹き荒れ

但し、現在各地の八重山民謡研究所で謡われて歌詞は、「雨あみが降るとうしヨーハンネ／さー北にしいから／曇くむるヤイスリ／ゆみばするとうし」となっている。

いずれにしても喜舎場永珣の解釈に従い、3月3日の潮干狩りの日に天気が急変したことが謡われているとすれば、これは「台湾坊主」のしわざとみることができよう。

ところで沖縄では、新暦の3月16日前後に決まって海が荒れる日がある。「堂のひや伝」には、冬至から数えて86日目に発生するという。これは台湾坊主の通過に伴う急激な風向変化が起きるため、これを「二月風廻りニンガチカジマーイ」と呼び、漁民にとっては台風について恐れられた。人々はこの現象の終わる時期を自然観察を通して見出している。宮古には「びやいまがんぬ 穴が いむかい んきゃんきや ニガツカザマーイ あ すまん」という俚諺がある。すなわち「びやいまがん(ツノメガニ。八重山ではハルマーカンという)の穴が海に向かわない限りニガツカザマーイは終わらない」という。ツノメガニの砂の穴は普段は海に向かってつくられるが、旧暦2月の季節風が吹く頃になると陸に向かって穴をつくるようになる。そうしたカニの習性をよく観察し、ニンガチカジマーイの終焉を判断したのである。また海水が濁っていたり、海草類が波打ち際に打ち寄せられることも判断材料の一つとされたという⁽²³⁾。

ところで与那国島には、「二月カジマヤー由来」と題する次のようなモチーフから成る昔話がある。

- ・夫に先立たれた妻は、女手一つで息子と娘を育て、息子は嫁をもらい、娘を嫁がせた後失明する。
- ・嫁は義母を疎ましく思い、目が見えない義母に毎日同じ食事を与え、母親はそれがおいしいので満足しながら食べる。
- ・ある日、嫁ぎ先から娘が帰ってくるというので、母親はおいしいおかずをとっておき、娘にそれを差し出す。
- ・それがミミズであることを初めて知らされ、母と娘は嫁の虐待ぶりに悲しむ。
- ・幾日か過ぎたある日、母は息子と嫁を呼び、「北の島に宝物を埋めてあるのでそれを取りに行きなさい」と言うと、欲張り息子夫婦は舟をこしらえて出かける。
- ・母が用意しておいたクバの扇であおぐと天気は急変し暴風雨となり、夫婦は舟もろとも波にもまれて死ぬ。
- ・これが二月カジマヤーの由来である。

この話は「うどんとミミズ」の話型で各地に伝わるが、ニンガチカジマーイの由来譚として語られるのは与那国島のみである。

5. 風占い

年初めに吹く風の方向によって、その年が豊年であるかどうかを占った。「福地家日記」(前掲)に次のよう記事が見える。

戊年中（同治13〈明治7〉、1874）

正月元日 晴天南風

但元日南風之時者豊年之由承候事

すなわち、元日の天候は晴天かつ南風が吹いたので、今年は豊年であると記している。また丑年（同治4〈慶応1〉、1865）の正月元日は晴天東風であったが、そこには次のような書き込みが見える。

此年何そ之豊年ニ而ハ無之候。南風之節ハ格別豊年之よし承候事。

此日東風之時ハ豊年之由承候。

すなわち、元日の南風は格別だが、東風の時も豊年であるという。

なお元日の風向きだけが豊年の予兆ではなかった。正月3日に、月が東に真っ直ぐに向かって出ると豊年の瑞祥であると言われ、子年（1864）・丑年（1865）・寅年（1866）の元日は東風であり、かつ正月3日の日には月もその通りに見られたので「大慶の至り」とであると記している。さらに午年（同治9〈明治3〉、1870）の元日条では、四方は晴れているのに、首里城の上空にのみ雲がかかり、人を少しぬらすほどの雨粒が玉のように落ちているのを見て、豊年の瑞祥であると人々が感悦したと記されている。

伊平屋島に伝わる「通書（仮題）」（新垣家文書）に、「毎年冬至之日未明ニ風根を見て来年作毛并年中運を知る事」として次のようにある。

子ハ中、丑寅ハ上世、卯ハ風雨、辰巳ハやまへ、午ハ早、未申ハ虫にかいあり

酉ハ乱、戌亥ハ豆之出氣年なり

冬至の未明に風根すなわち風が吹いて来る方向を見て、来年植えつける作物と一年の運勢について占うというものである。これによれば、子の方向の風であれば並の年、丑寅の方向であれば良い年である。また卯の方向であれば風雨に見舞われ、辰巳の方向であれば病気が蔓延し、午の方向であれば早魃があるという。未申の方向であれば虫が五穀を損ずため虫願いが行われ、酉の方向であればその年は乱れる。戌亥の方の風ならば豆が豊作であるという。

ところで中国の『玉匣記通書廣集』には「占元日日風」として、元日に吹く風によってその年の作物豊稔を占う方法が見える。また日本の『永代大雑書萬曆大成』には、「風の雑占」や立春・春分・立夏・夏至・立秋・秋分・冬至の日の「風の占い」が記されている。

沖縄の文献資料に見える上記の風占いは、『玉匣記通書廣集』や『永代大雑書萬曆大成』などの類書を参照にしながら沖縄の風土に合わせて考えられたものであろう。

6. 風のまじない

風を利用したり、風による災難を避けるためのまじないもある。そのいくつかの事例をみておきたい。

（1）鷲の羽

航海のことを謡った「船乗とのおもろさうし」によれば、アケシの神が聞得大君に随行して斎場嶽に祈願し、久高島に渡る時の「あけしのがこぼもりかなもりがふし」（巻13 - 847）に次の

ような一節が見える。

聞きこ爰ああけしのが
齋さや場は嶽たけ 降おれわちへ
蜻あけ蛉み御そ衣め 召めしよわちへ
風かざ直なり 差さしよわちへ
波なみ轟とどろ 海うみ轟とどろ
押おし浮うけて
百ひゃく名の浦うら走はりが
みもん

又とよ 鳴な響なむあけしのが

また久高島での神事を終えて帰ってくる時のオモロ（巻13 - 853）には、

せぢ新神泊
雲子寄せ泊
波風 和やけて
齋場嶽 君々しよ 守れ
朝風れが し居れば
勢遣富 押し浮けて
波風 和やけて
せらちよんの君々しよ 守れ
海直し 立てわちへ
波襲は 押しかけ
波風 和やけて
浦の数 君々しよ 守れ
風直り 煽らちへ
赤の御衣 煽らちへ
波風 和やけて
浦の数 君々しよ 守れ
蒲葵杜の君々
舞合ゑて 送らめ
波風 和やけて
首里杜 君々しよ 守らめ
金杜の君々
舞合ゑてす 送らめ
波風 和やけて
真玉杜 君々しよ 守らめ

名高いアケシの神が
齋場嶽に降りたまいて
蜻蛉の羽のような御衣をお召しになって
風直り（鷺の羽）を翳し給いて
波轟海轟（舟）を
浮かべて
百名の浦を走る様は
見物だ
貴きアケシの神が

稜威高き神の泊
ゆかしき寄せ合う泊
波風を和めて
齋場嶽の君々（神人）こそ守れ
朝風になれば
勢遣富（船の名）を浮かべて
波風を和めて
セラチヨンの君々こそ守れ
帆柱を立て給いて
波襲いは押しかけて
波風を和めて
浦ごとに君々こそ守れ
風直り（鷺の羽）を翳し
赤き御衣を翳し
波風を和めて
浦ごとに君々こそ守れ
クバ杜の君々
寄り合いてこそ守れ
波風を和めて
首里杜を君々こそ守れ
カナ杜の君々
寄り合いてこそ守れ
波風を和めて
真玉杜を君々こそ守れ

とある。この二つのオモロに出てくる「風直り」とは風波を和める標号で、髪に挿す鷺の羽の飾りのことと解されている。キューナに「にらい渡や潮荒さ、かない渡や海荒さ」（『南島歌謡大成』沖縄篇上、217頁）と謡われているように、久高渡中は波が荒い所であった。上掲のオモロに

「風直り 差しよわちへ」「風直り 煽らちへ」と語われていることから、風波を鎮め無事に渡ることができるようにと、船中の、国王や聞得大君はともかく、少なくとも随行する神女たちは皆、髪に鷲の羽を挿していたと推察される⁽²⁴⁾。

『宮古島旧記』には、根間いかりという人が、竜宮において先祖を祭り孝順の道を尽くす祭（こねり祭）を授けられ、これを島人に伝授する時、白鷲の尾羽を髪に挿したとある。またこの羽は12年に一度、9月に行われる祭の前に必ず白川浜に漂着するとも記されている。これからすれば鷲は白鷲であり、異界から送られてくる霊鳥として捉えられていたようである。

（2）口笛と風

室町時代前期に書かれた今川了俊の『言塵集』には「くち笛はうその事なり」とある。うそは漢字で嘯と書き、口笛を吹くは「嘯く」、その名詞形で口笛を吹くことを「嘯」とも言う。『日本書紀』（卷二神代下）に見える海幸山幸の神話には、海神が弟のヒコホホデミノミコト（山幸）に「風招即ち嘯也」として風招の方法を教える箇所がある。嘯くと海神が瀛風辺風を起こして波を立てることを伝え、「兄、釣する日に至及び、弟、浜に居して嘯きたまう。迅風忽ちに起こる」と、兄のホノスソリノミコト（海幸）が海辺で釣りをしている時、弟が口笛を吹くと急に風が起これ海は大荒れとなった。兄は溺れ苦しみ弟に命乞いをするが、それを聞き、「弟、嘯くこと已に停みて、風亦還息む」と、弟が口笛を止めると風もおさまったという。

口笛を吹くと風が起きるとするのは、口笛のピューという音が風を連想させるため、フレーザーの言う模倣呪術の一種である。

こうした口笛を吹くと風が吹くという俗信は現代でも全国各地に残っている。たとえば炭鉱内あるいはトンネル内では口笛を吹くと災害が起きるとか、海上で口笛を吹くと海が荒れるとか、また夜口笛を吹くと幽霊が出るといった、禁忌と結びつくものが比較的多い。

しかし一方で、風が止んで困る時には口笛を吹いて風を呼び込むこともあった。たとえば、本土復帰（昭和47）以前の八重山の農家では、刈り取った稲をその場で脱穀して麻袋に入れて家に持ち帰り、後日、庭に広げたニカフク（稲掃蕪、ねこぶく）の上で天日に干した後、ゴミや軽い籾殻を取り除く作業を行っていた。その選別作業では、籾を容器ですくい上げ、高いところから落とすのであるが、軽いものは風で飛ばされ良い籾のみが残る。その時、風が止むと口笛を吹いて風を呼んだ。その様子は八重山の蔵元絵師・喜友名安信（1831-1892）が描いた風俗画にも見える（写真1）。

また風を揚げる時は、一人が風を頭上に上げ、他方が糸を操るのだが、風が吹いてくるタイミングをねらって息を合わせて風に乗せるとうまく揚がる。ところが風が止んだ時には、口笛を吹きながら、いい風が吹いてくるのを待った⁽²⁵⁾。



八重山の蔵元絵師が描いた「イニトバシ人（稲飛ばし人）」
 (「八重山嶋農具類并士族平民風俗之図」〈琉球大学附属図書館所蔵〉)

(3) 鍋と台風

波照間島の民話⁽²⁶⁾では「鍋を海に浮かべると台風がくる」という言い伝えが語られている。民話の梗概は次のようなものである。

昔、波照間島で長いこと雨が降らず、島中の人々が総出で雨乞いをしていても効果はなく、島の人々は生きる望みを失いかけていた時、古老の一人が「鍋を海に浮かべると台風がくる」という言い伝えがあるから、鍋を引いて島を一周してみよう」と言い出した。「台風は怖い、台風は雨を持ってくるので実行してみよう」と話がまとまり、早速、翌日実行したところ、真っ黒な雨雲が現れ、やがて南風が吹き始め、だんだん強くなり白波が立って海は大荒れになった。効果はてきめんで、実際に台風が襲ってきて大方の家では甚大な被害を受けたが、それでも島の人々は大早魘にならずに大雨が降ったことを喜びあった。それから後、島の人々は海で鍋を洗うことを慎むようになった。

鍋と雨という奇妙な組み合わせがおもしろいが、今のところ、他に類話は見出せない。しかし『久米仲里旧記』所収の、大雨乞う時に儀間浜とあらはまで謡われる「くいにや（キューナ）」には、

新崎の大ころう	新崎の大男（村長）が
まころくか	まころく（大ころうの同義語）が
みななへは浮て	空鍋を浮けて
ゆなへは浮て	斎鍋を浮けて
五めぐりめぐて	五廻り廻って
七めぐりめぐて	七廻り廻って
雨降らちへたまふれ	雨を降らして下さい
いぶ降らちへたまふれ	いぶ（雨の同義語）を降らして下さい

という詞章がある。これによれば、鍋を海に浮かべて引き回すというのは雨乞いの手段であった

ようである。したがって波照間島の民話で語られた「鍋を海に浮かべると台風がくる」というのは、実は台風が慈雨をもたらすということからくるレトリックなのである。

おわりに

台湾の金門島には風獅爺と呼ばれる石像が多く見られるが、それは主に風に対する辟邪物である。村落のはずれに立てられたものや屋根上に設置されたものなど、その形や大きさもさまざまである。また日本では東北地方から中国地方にかけて、草刈り鎌を屋根の上や、竿にしばりつけたものを立てる習俗がある。ところが沖縄には風除けを目的としたこうした辟邪物はない。集落の境界や屋根上に魔除けとして置かれたシーサー（獅子）は台湾の風獅爺と似ているが、それに風除けの機能は含まれていない。またヤナカジケーシ（悪風返し）という言葉はあるが、この風は悪霊とか病気や不幸をもたらす邪気の意味で、一般的な風とは異なる。

沖縄には、風の中でも最も強力な台風が毎年襲来するが、不思議と台風が来ないように祈願する祭祀儀礼はない。沖縄の人々が最も恐れていたのは旱魃で、そのため長期にわたって雨が降らない時は雨乞いの祭儀が行われた。それは税金を納める側の地方のみならず琉球王府主催の雨乞いもしばしば行われた。すなわち雨乞いは王権とも密接に関わっていた。しかし雨乞いよりも確実に雨をもたらしてくれるのが台風であった。人々にとって台風は恵みの雨をもたらすものとして受け入れざるを得ない自然現象であったのである。

台風を忌避する儀礼はないとはいえ、農作物の生長や首里王府を往還する航海において大風が吹くことは死活問題であり、「風鎮め」「風止め」の祈願は行われた。

日本には『日本書紀』段階から風をつかさどる風の神が存在した。現在でも東北から九州までの各地で風神を祀る風祭かざまつりが行われているが、そうした風神の認識や風神を祭るという行事は沖縄にはない。それは「風穴」という概念がないこととも通じ、本土との風に対する認識の違いを示している。

注

- (1) 拙稿「久米島『堂のひや』の天気見様について」（琉球大学法文学部紀要『人間科学』28）
- (2) 程順則『指南廣義』所収（上江洲家文書、久米島博物館所蔵）。
- (3) 『岩崎卓爾一卷全集』（伝統と現代社、1974年）。
- (4) 伊志嶺安進『沖縄気象歳時記』（ひるぎ社、1987年）、石島英『台風学のすゝめ』（新星図書、1988年）など。
- (5) 喜舎場永珣「八重山の俚諺」（『八重山民俗誌』下巻122頁、沖縄タイムス社、1977年）。
- (6) 岩崎卓爾「石垣島気候篇」（『岩崎卓爾一卷全集』297頁）。
- (7) 正木讓『南風（ばいかじ）日記選集 その1』（石垣島地方気象台ホームページ）。
- (8) 嘉手納宗徳「『球陽』の中の方言」（『琉球史の再考察』あき書房、1987年）。
- (9) 豊見山和行「勅使御迎大夫真栄里親方日記について」（『歴代宝案研究』第3・4合併号）。
- (10) 豊見山和行「琉球王国における海運と漂流・漂着に関する研究」史料篇（科学研究費補助金基盤研究（C）（2）報告書、2004年）。

- (11) 石垣市史叢書7『翁長親方八重山島規模帳』（石垣市役所、1994年）。
- (12) 『日本庶民生活史料集成』第27巻所収（三一書房、1981年）。
- (13) 「萬曆書」（伊平屋島新垣家文書、沖縄県公文書館寄託）。
- (14) 『伊江親方日々記』（沖縄県教育委員会、1999年）。
- (15) 喜舎場永珣「石垣島の豊年祭と真乙姥綱曳」（『八重山民俗誌』上巻所収、沖縄タイムス社、1977年）。
- (16) 新里幸昭「宮古島狩俣の神歌補遺（二）－「御風鎮め」のニガリとピャーシー」（沖縄文化協会創設40周年記念誌『沖縄文化』、1989年）を参照。
- (17) コルネリウス・アウエハント『HATERUMA』（榕樹書林、2004年）。
- (18) 喜舎場家文書。牧野清『八重山のお嶽』（あ～まん企画、1990年）に翻刻あり。
- (19) 黒島為一「《史料紹介》『星圖』『天気見様之事』『星見様（仮題）』（『八重山博物館紀要』16・17合併号）。
- (20) 『多良間村史』第4巻資料編3「民俗」、高城隆・星加弘文「『星見様』の研究（上）（下）」（『沖縄文化』53・54号）。
- (21) 拙稿（前掲注（1））。
- (22) 伊波普猷「南島の稲作行事について」（『伊波普猷全集』第5巻、平凡社、1974年）。
- (23) 伊志嶺前掲注（4）著。
- (24) 伊波普猷「かざなおり考」（『伊波普猷全集』第5巻所収）。
- (25) 宮古では風を揚げようとしても風がない場合、「風の友よ、八重山の南方から廻って来い、廻って来い」と謡い、雨風のため風揚げや外出ができない時には、「雨よ風よ、八重山へなりとも、多良間へなりとも、流れて行け、流れて行け」と謡うという（N・ネフスキー／岡正雄編『月と不死』90~91頁、平凡社、1971年）。
- (26) 竹原孫恭『ばがー八重山の民話』第37話「鍋と台風」。